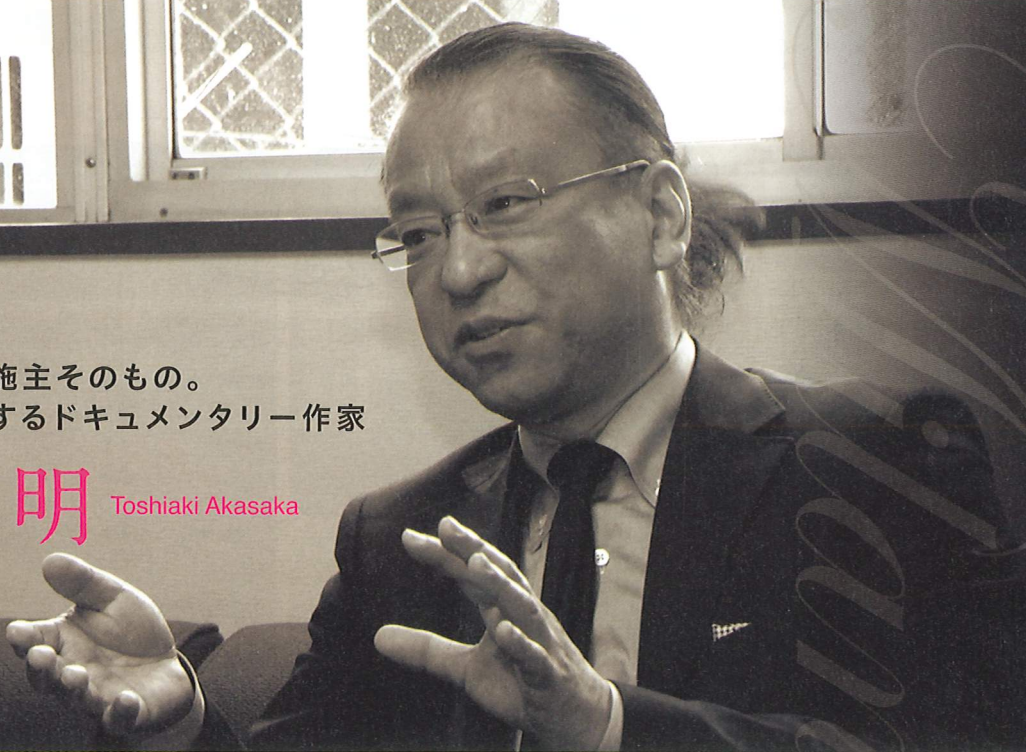


file.1

設計図に描くのは施主そのもの。
建築にアプローチするドキュメンタリー作家

赤坂利明

Toshiaki Akasaka



—ミラノ工務店に発注があってから、全く白紙の段階でまず動き出すのが、赤坂利明氏。建築のプロデュース、具体的には「あなたならこの敷地にどんな建造物が考えられるか」という要望に応えるプロポーザルを専門にする。その仕事は図面を引く姿を想像しがちな設計士のイメージとはかけ離れ、ことさらに施工主との対話に重きを置いたものだった。

施主の顔が見えない建物は設計できない。

直接的で密接なお付き合いがあって初めて建築の具体的なステップに進めます。クライアント様は建築においては専門家ではないので、希望があっても実際は何に惹かれているのかを表現出来ません。私はその人の趣向を把握し、技術的に提示致します。ですから、何を快く考えておられるかなどは常に意識しています。産婦人科のインテリアを承った時には、実際に分娩台に乗ったりもしました(笑)。そうでもないしと男性には分からない気持ちですからね。

三週間生活を共にして施主の求めているものが分かりました。

画家の遠藤剛毅先生は自分の作品を展示する美術館をご依頼になり、先生が惹かれる美の本質を探るために、三週間、ヨーロッパを回りながら生活を共にしました。どんな風景を見て、何を描かれるか。それを経て先生が求めているものが分かってきました。最終的にはゴッホが耳を切った病院の隣にある教会を二人ともが素晴らしいと思い、それをモチーフに設計しました。照明一つを選択にしてもその人の好みを把握した上でないできません。建築は何でもできる代わりに選ぶのは難しいです。

業界の方と同じくらいの知識を吸収しておきます。

建築というのは特殊な世界で単に計算だけでは成立致しません。パースが絵画のように全くの芸術になってはいけないし、構造や設備の計算と芸術性の中間点から、どちらかへと引っ張られ動いていくものです。また、法規的な問題もありますね。特に医療関係においては顕著で、新しい医療基準、介護保険の問題やいかに病院は淘汰される

かまで含めて本を読み、病院の先生方と同じくらい熟知しておきます。最近では医療の考え方も変わってきて様々な実験を建築で行うことも増えてきました。認知症患者へ刺激を与えるために、暖炉や滝を設けたり、また、バリアフリーにしても、身体能力の回復という面から見れば普通に近い階段の方が望ましいという解釈もあります。医療関係では当社の需要が多いです。

日本の伝統文化への造詣がないと柱の位置も決められません。

宮川町のお茶屋さんに依頼され、インテリアの設計をした時は換紙を640種ほどの唐長さんの唐紙様から選びましたが、柄や絵の来歴からお茶屋に相応しいものかまで調べ上げました。主役はあくまで舞妓さんであり、そのお客さん。空間を売る商売です。不備があってはならないですから。それに、障子紙や畳の目にしても、昔からの伝統につながる理由があり、茶道の世界と一般では違ったりします。熟知していないと炉も切れない、柱の位置も決められないんですよ。

他には、昔、鉄骨コンクリートの外観を木造の風合いにして、今で言う景観問題に迎合するものに先駆けたこともあります。エネルギー、エコの問題や地産地消の考え、そういった切り口を持った建築は施工主に訴えるものがあります。

建築には未だに人の力量や感性が問われています。

自分の生活スタイルにも通じるのですが、あえて遊びやゆとりの部分を持たせたいと考えています。京都の町家でも、路地があって、部屋、縁側があり、庭がある。外でも中でもない、プライベートでも公共でもないといった曖昧な部分。それは京都独特の文化であると思っています。それをいかに解釈するかは建築家にとって重要な部分ですね。

設計士と聞くと図面を引いているイメージを持たれるかもしれませんが、パースはあくまでも一つの伝達手段に過ぎません。重要なのはクライアントに代わって建築を形にするという意識で、それはまた建築本来の在り方であると思っています。建築は決してオートメーション化できない世界です。未だに人の力量や感性が問われているのだと思います。



赤坂利明

営業部 建築企画室長・プリンシパルアーキテクト

大学で教鞭を取った後、昭和52年入社。京都の著名人の邸宅を始め、遠藤剛毅美術館、医療施設等の設計を幅広く手がける。人並みはずれた顧客満足追求への熱意と実現力は、業界屈指の実力。

